

おきなわ森の道 海の道 いっしょに行こうね 100年プロジェクト 子どもと大人が協働で進めるキジムナー型公共事業による地域活性化

キジムナー型公共事業は、かつて沖縄全域に生息していた森の精キジムナーを呼び戻す取り組みを軸に、地域の多様な人々や組織を結ぶネットワークを作り、地域に新しい人とモノとお金の流れを生み出すことで、自然と共存する循環型社会の構築をめざします。地域に失われていた様々な繋がりを取り戻す新たな物語（文脈づくり）は、様々な出会いをとおして、足下に埋もれていた価値を人々に気づかせます。人々が地域の価値に気づき、それらの価値を共有し、さらに豊かなものにしようとする取り組みをとおして、地域のブランド創出や真の地域振興を実現します。環境保全と地域活性化を一体のものとする取り組みです。

キジムナーが子どもと大人を結ぶ。ファンタジーの力が地域を変える。

キジムナーは世代を越えて人々の心の中に生きているファンタジーです。ファンタジーは人々に既存の枠組みを越えた自由な発想を促します。だから、キジムナーは立場の異なる多様な人々を結ぶ協働の輪のシンボルになることができます。地元でファンタジーを感じることができる人が増えれば、地域は元気になります。多くの人が、夢や展望を持って生きることができます。だから、キジムナーを呼び戻すことは、失われつつある地域の人々のつながりを取り戻すことと重なります。

キジムナーが森と泉、川、海を結ぶ。

キジムナーの住処は、森やガジュマルの大木、きれいな水が湧くカー、カニがたくさんいる川、大好きな魚の目ん玉が獲れる海（サンゴ礁や干潟）です。キジムナーが生きていくためには、森から海までの自然のつながりが必要です。だから、キジムナーを呼び戻すことは、失われていた自然のつながりを取り戻すことと重なります。

ステップ1 キジムナー型公共事業による「まちづくり」

「まず、足元に目を向けてみよう」「深く掘れ、己が胸中の泉」伊波普猷

各学校での総合学習等を軸に、子ども達の学習成果や提案を活かしたまちづくりを実施します。各小学校区をコミュニティの基本単位として、それらが集まった集水域全体をより大きなコミュニティとして、さらにつながりを発見しながら沖縄全体へと視野を広げていきます。各地域の特性を活かしながら自然と共存するまちづくりを提案します。この「まちづくり」では、子ども達が地域づくりの主役として参画し、子どもと大人の互いの持ち味を活かし合いながら協働でまちづくりを行うことで、未来の沖縄の担い手を育成することを目的とします。

子ども時代に、地域の価値に気づき、それらの価値を活かしたまちづくりを提案する学習を行うことで、地域に誇りと展望を持つ人材を育成します（いま沖縄では地元の自然や文化を知らない人たちが多くなっています）。

子どもは、様々なものを結びつけるのが得意です。そして、物語を作るもの得意です。（大人は物事を分けて考えるのが得意ですが、縦割りの壁を越えたつながりを作るのは苦手です。）子ども達の豊かな感性や創造力を活かしながら、それぞれの地域に新しい発想による取り組みや多様な人々を結ぶネットワークを次々と作っていきます。

子どもと大人が協働で取り組むまちづくりを、コミュニティ機能を活かした循環型社会・エコタウン・脱温暖化社会のモデルとして世界に発信します。

例) 地域の環境を知るために、生きものとお話する方法をおぼえよう（視点を変えて生きものの目で地域を見直す）。

身近な生きもの達のすみかや道をさがそう（環境のつながりに気付く）。

森と海を結ぶ道をしらべよう（自分たちの地域が集水域であることに気づく）。

昔の環境を知ろう（昔はどんなつながりが地域にあったのか調べる）。

生きもの達の道をまちに増やす方法を提案しよう（地域に眠る資源を活かす）。

森と海を結ぶ道を増やす方法を提案しよう（まちづくりの提案）。

キジムナーが世代と世代を結ぶ。

「カムバック・キジムナープロジェクト」ちょんちょんキジムナー

キジムナーは昔沖縄全域に生息していました。各地での目撃情報が残っています。しかし、先の戦争によってキジムナーは沖縄本島北部の森奥深くに疎開してしまいました。戦後60年以上たった今もまだ元の生息地に戻ることができない状態が続いています。

そこで、自分たちの地域にいるお年寄りからキジムナーについての民話や言い伝えのある場所を教えてもらうなどの聞き取りを行ないます。同時に、キジムナーがいた頃の暮らしや環境についてや、いなくなった原因、どうしたらキジムナーを呼び戻せるか等についての聞き取りを行います。

お年寄りの知恵や経験と子ども達の夢や展望が出会います。子ども達の知らない世界を知っているお年寄りへの尊敬が芽生えます。（キジムナー型福祉事業）。

学習例) 地域のお年寄りの話を聞きながら昔の環境や暮らしについて学ぶ。

「キジムナーマップづくり」

昔キジムナーを目撃した場所（森、泉など）を調べ、地図に書き込む。

現在の地図と比べてみて、地域の変化を理解する。キジムナーの道・森と海のとつながりなど。

かつてのキジムナー生息地を参考にして、失われたつながりを取り戻す方法を考える。・・・他の生きもの達の道とも関連づける。

キジムナーが好きなものは・・・キジムナーと一緒にまちを見直してみよう。

キジムナーは大きな木のある森が好き、水が湧く泉も好き、元気な子どもも好き、カニのたくさんいる川も好き、魚がたくさんいる海も好き。静かな場所が好き。キジムナーが好きな場所があるか探してみよう！

キジムナーが好きな場所を増やそう！

キジムナーは子どもが好き。・・・だから、まず学校にキジムナーのすみかを作ろう。学校
ビオトープネットワーク（キジムナービオトープ）

学習例) 学校にビオトープ（生きものの住处）を作り、集まって来る生きものを調べます。集まって来る生きものを通して学校と地域の環境とのつながりを理解する。様々な生きものの生態を理解してビオトープを作ることで、多くの生きものの視点（自分の立場を離れ他者の立場）で地域を見る力をつけます。

さらに、もっと多くの生きものを学校に呼ぶ方法を考えます。地域に生きものの生息地や通り道を増やす方法を考え、林や街路樹や池、公園、庭、学校、家などを見直します。

ステップ2 キジムナー型公共事業による「道づくり」

自分たちの地域が集水域であることに気づく・・・森と海の間で暮らしていることを理解します。島の地質の特色を知る。

集水域という新たなコミュニティの捉え方を考える。新しいまちづくりの提案・・・水の循環を取り戻すために、雨水浸透弁の設置、透水性舗装、緑地の確保、生活排水対策などを考え、まちづくり計画に盛り込みます。

生きものの道を増やす方法を考える。生物の生息地のつながりは多くの場合水脈と重なり合います。森の保全再生やビオトープ、街路樹、公園、屋上や壁面の緑化などを体系的（全体のつながりの中）に捉え提案します。

水の道・生きものの道作りを通して未来の地域づくりを考えます。実現に向けて計画や目標を作ります（短期計画・長期計画）。それらの提案をまちづくり計画としてまとめます。学習例) 島の未来図。地図や絵、劇、文章になど自由。

地域の集水域モデルを沖縄全体に展開する。物語の舞台は島全域に。

「おきなわ森の道 海の道 いっしょに行こうね 100年プロジェクト」(図)

戦争によって沖縄本島北部に疎開したキジムナーを南に向かって呼び戻すキジムナーの道づくりを考えます(図)。

沖縄全体を視野に入れたエコロジカルネットワークを考えます。生きものの通り道や水循

環などをより大きな視野で考えます（地域ごとの循環の輪が連続した島全体を被う大きな循環）。

自分たちの地域を沖縄全体のつながりの中に位置付けてみます。

地域の夢をより大きな夢に発展させます。子ども達の学習意欲や夢の広がりと共にネットワークを広げます。

学習例) 沖縄各地のそれぞれの特色（多様性）を知る。これまでの学習成果を活かして、沖縄全体での展開を考えてみます。沖縄全体の生きものの道や水の道を考え、沖縄の未来図を描きます。

「キジムナーの道づくり」は人々や地域を豊かにする。

小学校ごとに行うまちづくり学習の交流によって沖縄全体を結んでいきます。異なる地域同士の連携を通して、新たな産業連関やコンテキストブランドの創出へと展開します。

学習例) 地域の自慢できるもの、お宝を探す。物語をとおした物づくりやブランドづくりを考える学習。他の地域の物とのコラボによる新ブランド・付加価値の創出など。

島全体を視野に入れた道づくり・長期計画

- ・森の道はキジムナーの道づくり
- ・海の道はジュゴンの道づくり

森の道と海の道が出会う場所としてのサンゴ礁や干潟の保全がジュゴンの道を作ります。

「ふたつの道の今は、沖縄の今を表している」

キジムナーは戦争によって失われた森の道の象徴

ジュゴンは戦争によって失われた海の道の象徴

キジムナーもジュゴンも大きな音が嫌いです。先の戦争でキジムナーもジュゴンも北の方に追いやられてしまいました。そして、今も基地がかつての生息場所への帰還を阻んでいます。また、都市化や開発の進行によって、生きものの道や水の道、文化の道も失われつつあります。

「平和の道づくり」

キジムナーの道（森の道）とジュゴンの道（海の道）を取り戻すことで、もう一度沖縄全体をつなぐことができます。そして、ふたつの道が出会う事で、平和というもう一つの大きな道につながります。平和の道は地球全体に広がります。まず、ひとりひとりのファンタジーから・・・北から南に向かったキジムナーとジュゴンが、平和の礎の見える海で出会う夢から物語が始まります。

ステップ3 キジムナー型公共事業による「地域振興」

「平和と交流」が沖縄の文化を創ってきた。

沖縄は昔から多様な文化が出会い交流する場として繁栄してきました。島全体のつながりを取り戻し交流を活発化させ、環境と平和のメッセージを世界中に広げていくことで、沖縄の特色を活かした本当の豊かさを実現することができます。

地域に失われていた様々な繋がりを取り戻す新たな物語（文脈づくり）は、様々な出会いを生み出します。そして、足下に埋もれていた価値を人々に気づかせます。地域に新たな交流（出会い）が次々と生まれることで、新しい人やモノやお金の動きを作ることができます。

それらの動きが、人々にさらに多くの価値の発掘を促し、それらの価値を多様な人々と共有することで、より豊かなものにしようとする意欲を高めます。人々の創意工夫に満ちた様々な取組みをとおして、地域のブランド価値が高まります。

キジムナーとジュゴンが戻ってくる物語は、コミュニティ再生や地域活性化、平和と一体化した持続可能な社会や循環型社会づくりの先進モデルとして、世界に発信していくことができます。物語は世界中につながりを広げ、沖縄の観光を活性化します。

キジムナーが

森と海を結ぶ。

お年寄りと子どもを結ぶ。

地域の人と人を結ぶ。

仕事と生きがいを結ぶ。

地域と地域を結ぶ。

地域の環境と地球環境を結ぶ。

過去と現在と未来を結ぶ。

平和な心と心を結ぶ。

夢と夢を結ぶ。

笑顔と笑顔を結ぶ。

・・・・たくさんのつながりの中から新しい価値が次々と生まれます。

ステップ4 キジムナー型公共事業による「地域基盤の強化」

もう一度、地域発展の原点を思い出してみましょう。

地域には、人々の命を支え、人々を結びつけた水がありました。

たとえば、泡瀬地区には集落の真ん中に 800 世帯の命を支えた共同井戸（カー）がありました。井戸の周りのカーヌ毛（芝生地）は人々が自然に集う場所でした。

集落内には多くの井戸があり、その中には「産井泉（うぶがー）」のように、子どもの誕生に結びついた井戸もありました。

「このように（カーを通した）共同体の絆は、しだいに助け合いの美風として、泡瀬の風土に根付いていった。」（泡瀬誌 復興期成会、括弧部分加筆、昭和 63 年 10 月 30 日）

そして、森からの水脈は干潟にもつながっています。このように、森の道と海の道が出会う所に、まちが生まれました。

そして、これからも森の道と海の道が地域基盤を創り上げていきます。

「深く掘れ、己が胸中の泉」これは、沖縄学の父である伊波普猷の言葉です。

すぐ足下にある宝物にみんなが気づくことから、この物語は始まります。

100年後の沖縄で、森の道と海の道が平和と交流の道になって、世界中に広がっていくことを夢見て、あなたの物語をつくり始めましょう。

キジムナー型公共事業は、地域に新たな価値を創造し続けます。

キジムナー型公共事業は、きめ細かな事業をとおして地域全体を活性化します。

地域に新たな人やモノや金の動きをつくり続けます。

キジムナー型公共事業は、沖縄に新たな観光資源（物語）を生み出し続けます。

キジムナー型公共事業は、地域に誇りと展望を持つ人材を育成し続けます。

キジムナー型公共事業は、沖縄の子ども達に海のように広い、寛い、博い心を育てます。

自然や社会のつながりを理解し、世の中に善いつながりを作ることができる心を育てます。

様々な意見や考えを持つ人々と協働で、問題の解決に取り組むことのできる心を育てます。

自分の地域から世界へと視野を広げ、夢を膨らませることができる心を育てます。

自然の不思議さや奥深さに驚き、その秘密を知りたいと思う心を育てます。

地域に眠っている可能性を掘り起こすことができる心を育てます。

自分の中でいつまでも子どもと大人が協働できる心を育てます。

地域に生き自分の人生をファンタジー化できる心を育てます。

地域に新しい価値を創造することが出来る心を育てます。

自然との共存や世界の平和を願い求める心を育てます。

さあ！キジムナーが帰って来る物語を作ろう！

キジムナーが生み出すファンタジーは海や森や人を結びつけて、地域を本当に豊かにします。キジムナーと一緒に地域のつながりを取り戻す物語を作りませんか。ひとりひとりが、地域を舞台にした自分の物語を持つことで、地域への愛着や誇りが生まれます。

「ちょんちょんキジムナー」

いつの日かふたつの道が平和の礎の見える海でひとつになる。

2011年6月2日

NPO法人アサザ基金